介護老人保健施設　しおさい

症　例　概　要　利用者氏名：　90代　男性

病　　名：　高血圧、脳梗塞、右頬部挫創・右肋骨骨折・右血胸

利用サービス：　令和8年3月～長期入所

経　　過：

令和7年12月在宅での生活にて転倒。右頬部挫創・右肋骨骨折・右血胸の為、西伊豆健育会病院入院となる。リハビリ目的にてしおさいに3月入所。入所時は帰宅願望、職員に対しての暴言、介護拒否など見られたが、多職種で日々の生活に寄り添い、リハビリ・日常生活でのご本人の想いを汲み取ることで、氏の言動、表情が穏やかになり、施設での生活を楽しんで過ごせるようになった症例。

内　　容

令和7年12月、氏は在宅生活中に転倒され、右頬部挫創・右肋骨骨折・右血胸の診断にて西伊豆健育会病院へ入院となりました。入院中はリハビリを実施されていましたが、独居生活であったことから在宅生活の継続は困難と判断され、リハビリ継続目的も含め令和8年3月にしおさいへ入所されました。

入所当初は環境の変化に対する不安や戸惑いが強く、介護拒否や暴言、不穏な様子が多く見られました。時には感情の高ぶりから物を投げる場面もあり、職員も関わり方に難しさを感じる状況でした。そのため、多職種によるカンファレンスを実施し、「氏に寄り添った支援」を共通方針として関わることとしました。

看護・介護職員は日々の体調管理や生活支援に加え、体操やレクリエーションへの参加促進、外出支援を行い、安心できる生活リズムの構築に努めました。リハビリスタッフは在宅復帰への思いを尊重し、意欲と身体機能向上を目的にリハビリを継続しました。また連携室はご家族との連絡調整や外出支援を担い、安心できる環境づくりを支援しました。

さらに部署を越えた連携を強化し、傾聴の時間を確保できない場合には他職種が柔軟に対応することで、氏と関わる時間を増やしました。安心して思いを表出できる関係づくりを重視し、日々の関わりを丁寧に積み重ねました。

その結果、徐々に氏は職員の顔や名前を覚えられるようになり、安心した表情で会話される機会が増えました。「昔はこの辺りで仕事をしていた」「俳句が好きでよく作っていた」など人生や趣味について語られ、表情にも穏やかさが戻っていきました。レクリエーションや体操にも参加され、不穏な言動も徐々に軽減していきました。

桜の季節には外出支援としてお花見へ出掛け、「懐かしいなぁ」「昔よく歩いた道だ」と語られながら満

開の桜を見て穏やかな笑顔を見せておられました。季節を感じる外出は生活意欲の向上にもつながりました。

現在では在宅復帰への思いを持ちながらも、俳句を作成し他利用者へ披露するという新たな目標ができ、日々意欲的に過ごされています。職員と共に作品作りに取り組む姿も見られ、生活の中に役割と楽しみが生まれています。

遠方からのご家族面会時には俳句や日々の出来事を笑顔で話され、ご家族からも「入所当初とは別人のように穏やかになった」と安心の声が聞かれました。

日々の関わりと多職種連携の積み重ねにより安心感と信頼関係が育まれ、本来の笑顔や意欲が引き出され、その結果、生活は穏やかで前向きなものへと変化し、毎日のキラキラとした笑顔と時間に繋がった症例です。

・看護：定期的な声かけを意識し、本人が安心する生活環境を構築

・介護：ご本人の直接的介護を中心に定期的な声かけ、話の傾聴。レクリエーションの提供

・栄養：本人に寄り添い、嗜好を取り入れ管理し、楽しい食事時間の提供

・リハ：歩きたい気持ちを汲み取りリハビリの実施。リハビリの合間に俳句を詠むなどの時間の提供

・連携室：桜を見に行きたい本人の気持ちを汲み取り、外出支援の援助を実施。